
ですっとダンス

月乃怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ですつとダンス

【NNコード】

N3501W

【作者名】

月乃怜

【あらすじ】

ですつと団のメンバー、一護・ルキア・ウルキオラは真剣に考え
る。

――この事件の糸口はなんだ?――

三人が必死に考えていたのは 教頭のカツラを勢い余つて取
つてしまい、いかに自然に元に戻すか。

こんなしょうもない事件を次々と起こしては解決していく。
ときには生徒会も加わって大波乱!!

スケットダンスを基にした敵味方関係ないゆるーいオールキャラ学園コメディです。よければお越しください！
(感想の制限をなくしました。誰でもお書きください！)

設定（ 隨時更新）（前書き）

このストーリーの設定です

設定（ 隨時更新）

ですつと団

黒崎一護…ですつと団リーダー

喧嘩が強くて不憫で苦労性

基本突っ込み役

朽木ルキア…白玉とウサギが大好き

よく一護に奢らせる

かわった口調でしゃべる

ウルキオラ・シフラー…トマトが大好き（分かる人にはわかるかも）

基本ボケ役
よく一護とルキアの写真を流出させてる

浦原喜助…ですつと団の顧問

あまり出番がない

化学室で変な薬作ってる（被害者一護）

生徒会

市丸ギン…生徒会会长

サボリ癖がすごい

干し柿生きがい。学校の裏でもこつそり作っている。

日番谷冬獅郎…生徒会副会長

ギンのサボリ癖に頭を抱えている

一護とは話が合う様

井上織姫…マイペース

味覚が個性的

発想がユニーク

伊勢七緒…苦労人

会長でも書類でビンタする
メガネをはずすと怖い

綾瀬川弓親…ナルシスト

目のひらひらが気になる
美しいもの大好き

その他

阿散井恋次…一護とは悪友

誰よりも不憫

サッカー部のキャプテン

檜佐木修兵…海燕と仲がいい

女子生徒に大人気

・黒崎家

黒崎一心…娘、息子、母溺愛の黒崎家の大黒柱でお調子者

黒崎医院の院長

黒崎真咲…黒崎家の中心

現在はカンボジアなどで医療の仕事をしている

黒崎海燕…黒崎家の長男

プラコンでシスコンのしつかり者

黒崎遊子…双子の長女

すごいお兄ちゃん子

今は母の変わりに家事をしている

黒崎夏梨…双子の次女

一護と似た雰囲気を持っている

・朽木家

朽木紺真…ルキアの姉

大人しく、優しい性格

・シファーア家

グリムジョー…シファーア…ウルキオラの弟

兄に同じくトマト大好き

名前に無理がある

学年の組織

2	2	冬獅郎・井上
2	3	一護・ルキア・ウルキオラ・恋次
3	4	海燕・修兵・都
3	2	乱菊・ギン

数学教師…朽木白哉 ルキアとは義兄。紺真と結婚している
国語教師…藍染惣右介 メガネを取るとオールバックになり（心
が）オールブラックになる

化学教師…涅マユリ 一護や恋次をやたら解剖したがる

体育教師…更木剣八 一護がお気に入りの戦闘狂 眼帯を外すと

でかくなるとか

— 講べるの吸難（前書き）

基本一話完結です

一 護ぐとの受難

一時間目・英語

一時間目から英語つてなんだよ。気分下がるわ。国語やらせり国語。

隣のルキアはさつきから

「私は日本人だ。英語など必要ない。」

とかぶつぶつ言つてるしょー。つーか怖いわ！

教師はこつちガン見してくるし、黒板爆破してくんないかな。

二時間目・体育

ちょっとまで、何だこの状況。

なんで俺、更木先生に追いかけられてんの！？

更木先生には『絶対に気に入られてはいけない先生』という嫌な称号がある。

この称号がついている人は他にもいるが、俺はこの人だけで十分だと思うんだが…

「殺さうぜー護オーー！」

つて言つてゐるけどあんた一応教師だろ。教師がそんなこと言つていいのか。

周りの奴らも見慣れたような田や、哀れな田で見るな。

とりあえず助けてくれ。

二時間目・化学

これはやばい。命の危機だ。

涅先生も『氣に入られてはいけない先生』の称号がついてる。

涅先生がニヤニヤした顔でこちりに向かつてくる！
待つてください、俺にはまだやり残した事があるんです。

遊子、夏梨、お兄ちゃんはもうすぐ死んでしまうかもしません。
仏壇にはチョコレートと明太子を供えておいてください。

そう死ぬ覚悟を決めたとき、恋次がタイミングよく話しかけてきた。

先生の田が「いっしでもいいか」と光った。

俺はその隙を逃さず、その場を恋次に任せて一旦散に逃げた。

「え？ 一護？」

「ちよつと君、手伝ってくれないカネ？」

「あ、え？ いや、俺は…」

「いいじゃないカー。」ちらりと来タマヒヨー。」

あぎやあああああああああああ

そのあと恋次の叫び声は聞かなかつたことにした。

四時間目・数学

数学は結構すきだ。先生もまだ普通で分かりやすい。でも、やっぱ「」の学園の先生わけで…

「では、この問題分かる者。手を挙げよ」

「先生」

「なんだ、分かったのか？」

「檜佐木くんが爆睡中です」

「……せうか、ならばしかたがない」

先生はカツカツと修兵の近くまで行き…

ガツ…！

メロッヒ机に修兵型の穴が開いた。

「グホつ！？？」

ありえない音が修兵の頭から響いた。

「起きたか。では、授業を再開するぞ。では檜佐木、この問題を解け」

「え、ちょ…分かりません…」

「これからはしっかり聞いておくよ！」

これだから朽木先生の授業は寝られない。

「わすが兄様…」

ルキア、お前はどうか変だ。

こんなことがつづくと身体も疲れきついていて。
おかげでぐっすり眠れる毎日。

……てか、これからもこんな日々続くの？

勘弁してくれ……

一 謹べたの収難（後書き）

兄様動かしにくつ！

つねに、小説書くのつてこんなに大変なのか・・・

感想、文章構成、誤字脱字など、どんどんよろしくお願いします！

生徒会のサボリ癖が酷いんだがひつめつめ(前) (前書き)

田畠谷くふと乱菊さん登場です。

生徒会長のサボリ癖が酷いんですがどうしよう（前）

PM3:00 ですと団部室にて

生徒会副会長の冬獅郎が相談があると、部室にやって来た。

「ですと団に少し協力してもらいたいことがある」

「珍しいな、生徒会からなんて…んで、用件は？」

「うちの会長、市丸会長のことだ。」

そう、深いため息をつきながら言った。

「おい、大丈夫か？俺達でよければいつでも相談乗るからな？」

うんうん、とウルキオラとルキアが頷く。

「お前ら…いい奴だな」

まあいい、それで用件というのは会長の弱みを握ってる奴を探して欲しい

「それはまた…そんなに苦労しているのか？」

「伊勢も井上も綾瀬川も困っている」

「わかった。探してみるよ」

「すまないな。では仕事が溜まってるからこれで帰る」

「がんばれよー」

「うう、冬獅郎は帰つていった。

「一護、依頼はつけたものの、どうやって探すのだ？」

「 そうなんだよな。」

「 貴様何も考えず受けたな？」

「 う… でもあのやつれた顔見るとなあ…」

うーん、と考え込む三人。

何かを思いついたようにウルキオラが口を開いた。

「 そういうえば、市丸会長には幼馴染がいたな。その人を使うというのはどうだ？」

「 ああ、あの有名な乱菊さんか？」

松本乱菊といえば、この学校で知らない人はいないくらいだ。高校生とは思えないくらいのナイスバディだが、本人はサバサバした親しみやすい性格である。

「 聞けば市丸会長はその松本先輩に頭が上がらないという。」

「 それはいい案かもしけれんな！」

「 ああ！ それで行こうつー！」

3 - 2 教室にて

「 あの、松本先輩は居られますでしょうか？」

「 ん？ おう、松本だな。おーい！ 松本！ 後輩が呼んでるぞ！」

「 え？ あたし？ はいはーい」

乱菊はすぐにこちらに走ってきた。

「 あたしに何か用かしら？」

「 はい。あの、市丸会長の事なんですけど、あの人が全然仕事し

なくて生徒会の人達が困っているんですけど、なにかいい手はありますか？」

「ああ、またあいつは……うーん、そうねえ……」

なにかなかつたかと考え込む乱菊。
ん?と思いつ出したように言い始めた。

「あいつ、昔から寝相悪くてね、起きたら布団がひっくりかえつてるわ、目が覚めると部屋からでて廊下で寝てるわで大変だったのよ。それが仇となつて中学校の修学旅行でなぜか部屋が違うあたしの所に来てたの。朝起きたらびっくりしたわー。隣でギンが寝てるんだもの」

笑い事でない氣がするがそんな事があつたそつだ。

その後ギンは乱菊と同じ班だった女子に騒がれて修学旅行は大変居心地悪かったそつな。

「……女の敵だな!」
「いや、市丸会長も悪氣があつた訳じゃないし……」
「少し同情する」

意見様々だが会長の弱みは聞きました。

生徒会長のサボリ癖が酷いんですよひつまつ（前）（後書き）

長くなつたので後編につづります。

生徒会長のサボリ癖が酷いんだがひつもつみつ（後）（前書き）

前回の続きをです。

生徒会長のサボリ癖が酷いんですねがひつまつ（後）

です」と団は生徒会室に向かっていた。

「しつかし、ウルキオラが居てよかつたわ。俺等じゃ思いつかなかつたと思つぜ」「せ

「いや、言つぱりでもない」

「むつー！貴様と一緒にするでなーーー！」

「おめー、俺に勉強で勝つたことあつたか？」

「貴様……」

一護とルキアの喧嘩が始まった。

こつものことなのでウルキオラは気にしていない。

「一護、ルキア、そろそろ喧嘩はやめり。着いたぞ

「あ、もうだな

」
コンコンッ

「どうひとと団です。失礼します

「冬獅郎、見つけたぜ、生徒会長の弱み

一護はニヤッと得意げに笑つた。

「本当かーー？」

「ああ。まあ、その方法を見つけ出したのは我が団唯一の理系だけだ

そういうながらウルキオラに田配せした。

「これはちよつとかわいそつだと思つけどな」

「うういー始め、話してこつた。

よつやく話し終わると、

「……うか、ありがとな、ですと。これで会長に俺達と同じ苦しみを『えられる』」

冬獅郎は疲労が限界のようだ。思考が危ないぞ。

「おい、皆。今の話はしつかり聞いていたか?」

「はい、もちろんです」

他の二人もしつかり頷いている。

「では、明日この作戦を実行だ」

翌日

「なんやの、こきなり呼び出して。仕事せんでこいかつてどういふことや? そりゃ嬉しいけど…」

ギンは状況が読めていないようだ。

「会長、貴方が仕事をサボりまくるから俺達はもう疲れたんだ。だから

「下克上だ」

「会長、貴方はほものす」、寝相が悪いそつです、ね
ギンが理解していないま、話を始めた。

「え、なんでその事知ってるん?」

あんたの幼馴染に聞いたら、すぐに教えてくれた世?ついでに

中学校のときの事もな

お 待 て そ れ て も し か し て

洋子は断末魔を叫び、冬獅郎は悪人面でトヲウマを抉り出し始め

た。

これではどちらが被害者で加害者なのか分からない。

「わかつた！ ちゃんとこれから仕事します！」

会見　その言葉忘れないでくれたかいね
　　し　あ

「これら全部会長のはんこが無いといけないんでお願ひします」

「…………え？」

書類の山かいくへも出来てした。

「 」 二二二

泣きながら手を動かしていた。

ドアの外から聞いていたのですつと団は

なんか冬獅郎が鬼に見えた

教訓・仕事は「コツコツ」とこなす。つまり、

生徒会長のサボリ癖が酷いとやがれひつもつゅう（後）（後書き）

オチつてなんだ。

ギンファンの體つき「めんねむこーーだつて動かしやすいんだも」（

）」（）もで読んでくだわつてありがと「」（）もしたーー

ヒーローになれるでしょうか？（前書き）

ヒーローでお馴染みの（お馴染みか？）の人です。

ユーローハンマーはいつしたりここですか？

AM 8:00 昇降口にて

「お、一護おはよ！」

「おお、ルキアか。はよ、

ほとどこの生徒がこの時間帯に登校していくる。

途中で出会つたウルキオラと会流し、下駄箱へ向かつた。
一護が自分の下駄箱を開けると白い封筒が入つてゐる。

「ん？なんか入つてるぞ？」

「なんだ？手紙のようだが・・・」

「もしかして、ラブレターか？案外貴様も隅に置けんな」

「ヤーヤしながらルキアが言つと

「オメーは親父か。えーっと・・・ですつと団に頼みたい事があります。放課後、中庭に来てください・・・だとよ」

「なるほど。とりあえず中庭に行つたらいいんだな？」

「ああ。ん？まだあるぞ。P・S・スメルズ・ライク・バット・スピリッツ・・・・

なんか嫌な予感しかしねえ・・・

「ああ、同感だ」

PM 2:30 中庭にて

「遅いな」

「まつたく、自分から呼び出しておいて遅れるとは……」

「一人とも立腹の様だ。」

「……一人とも、上を見る」

なにかに気づいたようで、ウルキオラは一人に言った。ウルキオラに言われた通り、空を見上げると

「ボハハハハー！！」

人が空から飛ぶように落ちてきた。

ドスン！

「ブホオ！？ゲホツ・・・ゲツホゲホツ！ゲホツ！」

「・・・・・・・・・・」

全員が言葉を失う。

そして依頼者、観音寺は三人を指差し、

「スマルズ・ライク・バット・スピリッツ！」

「・・・・・・・・・」

「なんか反応したまえよ！」

「いや、反応しろって言われても、どう反応したらいいかもつともな意見だ。」

「てゆーかなんで落ちてきたんすか」

「先生方から、学校でのパラシュートは禁止って言われて……」

「普通に歩いて来いよ！」

観音寺先生は歴史の先生でいつも奇抜な服装をしている。先生には『気に入られても困る先生』の称号がついていた。

「で、依頼ってなんですか？」

これ以上放つておくと大変なことになりそうだ、と判断したウル

キオラが言った。

「ああ、私からの依頼内容はね、

「私をヒーローにして欲しいんだ」

「はあ・・・」

「私は街中で『あ！ドン観音寺だ！』とか『ヒーローよー』とか言われたい！そしてあわよくば、女性と付き合いたい！」

三人は最後のが本音だろう、と思いながら力説している観音寺を見ていた。

「まあ、内容は大体わかりました。とりあえず、その服装から変えていきましょう」

「W h y! ? なぜだ！？」

「はつきり言いますと、ダサイです」

観音寺はかなり落ち込んでいる様子だ。

「わかった、変えよう。して、どんな服を着ればいい？」

「そうですね。スーツとか持つてないんですか？」

彼はナイスヒゲでワイルドっぽいから元はいいはずだ。

「ああ、持ってる。」

「あとサングラスも外してください」

「あ、はい」

完全に観音寺は下手に出ている。

数分後

「「」んな感じでどうだ？」

そこに居たのはサングラスを外し、スーツを着こなしたワイルド

な男性だった。

「おおー、いいんじゃないか？普通にかっこいいぞー。」

「いいと思う」

一人にも好評だ。

「ありがとウ。じゃあと団、この恩は忘れないよ・・・」

もうここ、観音寺は街中を歩いてみる」とした。暇だつたですと団はこつそつこして行くことに。

街中を歩くとちらちらと振り返る人たち。

(なかなか・・・いいものだな)

そう思いながら歩を進める。

少し休もうと、観音寺はベンチに座った。

すると少し後ろのほうから女性の叫び声が聞こえる。

「あやあーひつたくりー誰かー！」

その言葉に反応した観音寺は

「むつー私がユーの鞄を取り返してみせるぞー。」

そう言つて走つていった。

その場に居合わせたですと団は

「ひつたくりだーー譲、こぐやー。」

「了解イー！」

そう言つて走る。ウルキオラは

「あいつら、観音寺が見えるのか？」

と、せつかく観音寺をヒーローに仕立てるチャンスを見逃してい

る一人を見守った。

「チツーもう追いかけてきやがったー！」

引つたくなり犯は未だ逃走中。

「そこのゴー！女性のバッグを返しなさい！」

「観音寺は必死で犯人を追いかける。

「くつそ！」

もう少しで犯人に追いつきそうだ。

すると犯人は見えなかつた石につまずき、盛大に転んだ。
その転んだ犯人に観音寺はつまずき、数メートル先に飛んだ。
犯人は急いで立ち上がり、走ろうとすると何者かに急に乗つから
れ、

逆えび固めをされた。

「いってええええええ！……痛い痛い！誰だ！？」

「わりいな。返してもううぜその鞄」

「あつ！」

逆えび固めをされている間に誰かに鞄を抜き取られてしまつた。

「もうすぐ警察来ると思うけど、まだ抵抗するか？」

「・・・くそつ！」

数分後、警察がすぐ来て犯人を捕まえた。

「警察に連絡したのウルキオラか？」

「ああ」

鞄の持ち主の女性がこちらに来て礼を言った。

「あの、ありがとうございました！」

「いえいえ、こいつが勝手にやつたことですから」

「本當です。こいつが行くぞ、なんて言つてやつたことです

「なんだと！？貴様も乗り気だつただろう！」

「テメーがいきなり言つから身體が動いたんだよー」

「お前たち、一応人の前だぞ」

少し談笑をした後、ですと団は帰つていった。

「なあ、なんか忘れてる気がするんだが・・・」

やつと氣づいたかとウルキオラがため息を吐いた。

「お前ら、観音寺先生のこと忘れてるだろ?」

「「あ」」

「ビーするよ・・・」

「もういいだろ? これからもヒーローになりたいか、なりたくないかを決めるのは先生次第だ」
もうさすがに懲りただろ?」

「むむむーーもしやですっと団もヒーローの座を狙つて・・・!」

次はですっと団をライバルとしてみていくようだ。

ユーロユーロなる言葉はいつからここですか？（後書き）

観音寺の口調がわからんねえ・・・

今回なおこしい所取りのやうつと困りました（笑）

ぐだぐだと長くなりましたが、ここまで読んでいただきありがとうございました！

感想・誤字脱字などよろしくお願ひします！

ルキアちゃんの繪圖（前書き）

テストのお話です。

ルキアちゃんの審問

PM2:30 ですと団部室

「そういえば、もうすぐテストだな」
きつかけはこの一言だった。

「ああ。ところでルキア、お前大丈夫なのか？」

「あ、ああ。大丈夫だぞ！」

肩が揺れ、きよどり始めるルキア。明らかに態度が変だ。
二人はすぐに察す。

(「いつ・・・嘘だな）

「なんだ！ その疑いの目は！」
「ルキア、一回ノート見せてみる」
そう言うと焦り始めた。
「い、いやだ！」
「何も書いてなくとも怒らねえって」
「・・・本当だな？」
そう言ってゆつくりとノートを一人に見せる。

「・・・これは」

「予想はしていたが真っ白だな」
「うつ・・・だから見せたくなかつたのだ！」
ルキアの目は半泣き状態だ。
しかし、これ以上のことをウルキオラが言つ。

「・・・一つ提案がある」
「なんだ？」

「俺が小テストを作る。それを解いてみたらどうだ。」

「いいんじゃねえか、それ」

「なつ！？いやだ！」

ルキアが必死で反対するのを見て一護が言つ。

「ルキア」

「・・・なんだ」

「団長命令な」

「職権乱用だー！」

ルキアの叫び声は廊下に響いた。

数分後

「出来たぞ」

ウルキオラの作った小テストをグチグチ言いながら解いたルキアは疲れ果てていた。

採点結果

国語	90	点
数学	40	点
理科	42	点
英語	25	点
社会	88	点

「・・・これはまた」

「ある意味凄いな」

「う、うるさい！」

ルキアもう泣く寸前だ

「でも、国語と社会はかなり良いじゃねえか」

「理数系は壊滅的だが」

ウルキオラが止めを刺す。

「・・・理科と数学は頑張れば何とかなりそうなんだが、英語はどうしてもな・・・」

落ち込むルキアに一護が救いの手を伸ばす。

「しょーがねえな、英語は俺が教えてやるよ」

「なら、俺は数学と理科の勉強の仕方を教えよう」

ウルキオラはいつも学年主席、一護はトップ一〇には入っている。

「・・・いいのか?」

「元からそのつもりだったしな」

一護してルキアのテスト勉強が始まった。

英語

「で、どじが分からないんだ?」

「全部」

「おじ」「」

即答で答えた。

「まあいいや、じゃあ簡単な問題作るから、わからなかつたら呼

べ

「うむ」

数秒後

「一護、わからん」

「はええなオイ。で、どじだ?」

ルキアの指す問題を見ると

「have to と must の違いは何だ?」

「そこ中学の問題じゃねーか!」

「have to と must は同じ意味だが、否定文になると ～しなくても良い と ～してはならない になる」

「うーん・・・イマイチ」

「そうだな、例で言つと肯定文は

恋次は涅先生に逆らわなければならぬ、とする。

否定文では、涅先生に逆らわなくとも良い、と涅先生に逆らつてはいけない、になる

「ほうほう…どうひじこじろ恋次の命運は叶かぬだが分かつたぞ

！」

恋次を犠牲にして少しづつ理解していくようだ。

理科

「どうやって勉強したらいいのだ？」

「自分で分かりやすいようにノートにまとめたうらうらだ？」

「おお、なるほど…」

「・・・よし、出来たぞ！」

「そのノートを毎日数回繰り返し読むといい。それだけで随分違うからな」

数学

「」の問題を聞いてみると、といわれたルキアは黙々と解いていた。

「む？ これはどうやるのだ？」

「」の問題にはこの公式を使つ。

・・・よく出来ているな。次からは応用問題をすると良い。応用は配点が高いからな

ウルキオラはアドバイスをしつつ、教えていた。

「」のじて一週間が過ぎ、テスト当日

（むつ！？なんだか凄い勢いで問題が分かるぞ！）
勢いが良すぎてルキアの席からはゴリゴリゴリとありえない音
が鉛筆から出ていたそな。

テスト結果

国語	95点
数学	70点
理科	75点
英語	65点
社会	80点

そして学年でトップ20に入ったそな。

「一護！ウルキオラ！」
「おー、見たぜ。頑張ったな」
「・・・おめでとう」
「一人ともうれしそうに祝福してくれた。」
「ああ！一人のおかげだ！」
「ばーか、最終的に頑張って努力したお前の結果だよ」
三人で少し話した後、
「・・・よし！テストも終わつたし景気づけにカラオケ行くか！」
「たまにはいいな。俺は賛成だ」
「行くぞ！」

そう言つて三人は走つていった。

ルキアちゃんの翻訳（後書き）

・・・なんかウルキオラすつじこしゃべつてるような・・・
ま、いつかー（

高校の問題は分かりません。
だつて中学生だから（オイ
なんの教科があるかなんて知らないよー

ウルキオラつてどんな歌歌うんだるつか？

J - P O P ? いや、想像できないな。

演歌か？いや、それはそれで面白いけど（いいのか

）J - P O P まで読んでくださいありがとうございました！
感想、誤字脱字などありましたらお願いします！

大波乱の体育祭（前書き）

あわわわ・・・お久しぶりの更新です。
体育祭のお話です。

大波乱の体育祭

AM9:00 運動場

今日は体育祭でどのクラスも気合が十分入っている。

それは一護たちのクラス、2 3も例外ではない。

「それにもあつついな・・・」

「そうだな。まさに体育祭日和だ」

一護とルキアが少し話していると、織姫がやつて來た。

「黒崎くーん、朽木さーん！」

「おお、井上。どうした？」

「いよいよ体育祭だね。2人とも何の競技に出るの？」

「私はハードルだ。一護は確か、1000mだつたな」

「ああ。・・・それにしても井上楽しそうだな」

一護の言つとおり、織姫はいつも以上に笑顔だつた。

「だつて借り物競争があるでしょ？自由参加だから出ようと思つて！」

去年まで借り物競争は他の競技と同じ人数制だつたのだが、毎年大勢の参加希望者が出て後からブーリングが出るので自由参加にされたのだ。

ピーッと笛の音が聞こえた。

「100m走の選手の方は召集テントまで来てください」

召集係の者の声が聞こえる。

「あ！あたし100m走だつた！じゃあね！」

「おー、がんばれよ」

「一護」

突然ウルキオラが声をかけた。

「ん？どうした？」

「部活対抗リレーはどうする。参加するか？」

「俺はどっちでもいいけど……ルキアは参加したそ娘娘な」

キラキラした目で見上げてくる。

「したいぞ！」

「俺もしたい」

「じゃあするか。何もって走る？」

三人は考え込む。するとルキアが

「ですっと団の宣伝しながら走るか？」

「あー、それでいいんじゃね？」

「決まりだな」

何事もなく、午前の部は終了していった。

100mでは織姫と修兵が一位、1000mでは一護と恋次、走り幅跳びではギンと冬獅郎、ハーダルではルキアとたつき、ハンドボールでは海燕とウルキオラ。

午後の部は借り物競争や綱引きなど、得点の付く競技はあまりない。

昼休みの間に部活対抗リレーが行われる。基本は5人くらいでトラックを3周走る。

しかし、ですと団は3人なので一人一周走らなければならない。

左から剣道部、柔道部、吹奏楽部、サッカー部、バスケットボール部、テニス部など並んでいる。

「よーい・・・・ドン！」

パンとピストルの音が響いた。

剣道部は竹刀を素振りしながら走つたり、吹奏楽部は吹きながら走つていて中でですと団は・・・

『猫探し、部活の助つ人、雑用なんでも受け付けます。ぜひご利用をー』

スピーカーを持ちながら軽やかに走っていた。

「うおおい！あれずるくね！？俺たちが必死に走つて中で宣伝と

か…」

『つるさい恋次。もうたい焼きおじいさん一冊』
「すいませんでした！」

午後一番では借り物競争が行われる。

コースの真ん中に箱があり、その中に手を入れてお題を成し遂げる競技だ。

そのお題は恥ずかしいものもあれば簡単なものもある。

修兵の場合

「一番付き合いが長い異性」

(一番付き合いが長い異性ねえ・・・あいつかすぐには自分のクラスの所に走った。

「ちょっとこいつ借りていくぞ！」

そつ言つて扱いだのは蟹沢だった。

「うわあ！え？なに？」

そのまま一直線にゴールに行つた。

『女子生徒に人気の檜佐木選手！お題は何だったのでしょうか？』

「一番付き合いが長い異性。こいつ一応幼馴染だしな」

「なんだ、そなうそうと言つてよ。焦つたじやない」

恋次の場合

「今一番輝いている人」

(輝いている人オ？うーん・・・後で怒られるかもな)

「一角さん！ちょっと来てください！」

「お？なんだ？」

そのままゴールへ行く。

『たい焼き命！な阿散井選手！お題は？』

「つむせーよ。お題は・・・ハイ」

そう言つてお題の書いた紙を渡すと逃げ出した。

『何だつたのでしょうか？えーと・・・

今一番輝いている人・・・

そう云うと金貴が一角の頭を見た。

一角は恋次を追いかけていた

海燕の場合

「マイハ」

(なん)「お題たよ、
じゃあ行くか!」

者！行くぞ！」

えいなにかしき

そのまゝ横抱きをして一トリ

『兄にいたい』(「兄」) 遺三 お題に

「少頃、二郎の娘の母が、二郎の娘の母の娘の母が、

糸を引く染色工が、机に机扱きで立たる。机の上には、

ヒューヒュー、よそでやれ!、リア充が!など色々聞こえてくる。

最終種目はクラス対抗全員リレー。

た。

「このリレー勝てば俺たちは優勝だ。気抜くなよ！」

下荒上しゃあああああああ!!!!

そんないで田舎を経んでいた

ギンが何かを夥一ぱつたよひに靈えていた。

抜かし抜かれしていたが、アンカーから一番目になると全く一緒の所だ。

「弟でも今回は負けられねえな」

「言つてられるのも今のうちだ。俺が勝つ」

ついにアンカーの一護と海燕にバトンが渡つた。

『海燕てめー、弟だからって手加減すんなよー』

『今回はブラン封印しやがれ！』

『都が待つてるぞー！』

など、声援が聞こえる。

『兄貴に負けんなー！』

『頑張れー！黒崎ー！』

『根性見せるー！』

一護達のクラスも負けてはいない。

『おおーっと！有名な黒崎兄弟の夢の対決だー！兄の意地をみせるのかー？それとも弟の下克上がはじまるのかー？』

実況も熱くなっている。

残り数メートルをほとんど同時に走りきつた。

『ゴール！さて、判定は・・・』

みんなが唾を飲み込む。

『勝者！3 - 4です！』

ワアアアアと歓声が上がった。

感極まつて、涙を流している生徒もいる。

「わりい。負けちまつたよ」

「しようがなさいさ、校内一速いつて噂の人だしね」

「あれに追いつく一護もすごいよ」

「でも総合で一位だぜ？すげーよ！」

一護も暖かな雰囲気に包まれていた。

PM 8:00 黒崎家

井上の提案があつて黒崎家で打ち上げをしていた。

体育祭が終わつたあとすぐに打ち上げをし、ドンチャン騒ぎをして

疲れたのか眠る者も出始めた。

一護が全員に掛け布団をかけていると、海燕が一階から降りてきた。

「よう、大分静かになつたな」

「わりいな、疲れてんのにうるさくして」

「いいさ、楽しかったんだる」

兄弟でたわいない話をしていると一護が「うとう」と目をこすり始めた。

「こいつらのこと見ててやるからお前もちよつと横になれ」

「んー。 そうするわ」

すぐに寝息を立て始めた一護に微笑みながら

「おやすみ」

そう言つた。

大波乱の体育祭（後書き）

一回題名を入れ忘れてデータ全部消えたんだぜ・・・？信じられるか？

どうしても海燕さんを入れたかったんです。

都さんは親公認のカッフルだつたらいい。

設定のほうを色々書き直しましたので詳しくはそちらを。

それにもしても今回ルキアとウルキオラ全然しゃべってねえ・・・。

では、誤字脱字の報告、感想などお待ちしております！

大混乱の文化祭（1）（前書き）

文化祭のお話です。

恋次が相変わらず不憫です（笑）

長くなると思いますのでいくつかに分けて更新します。

大混乱の文化祭（1）

AM 8:00 教室にて

「もうすぐ文化祭だな」

「ああ。うちのクラスは喫茶店だからなー!」

「へえ、そうなのか?」

「貴様・・・寝ておつたのか?」

そのときの一護は爆睡中だったようだ。

「思ったより普通だな。うちのクラスのことだからもっと変なのかなと思つてた」

自分のクラスをどのように認識しているのだろうか。

「変な提案もあつたが委員長がばつさり切り捨てたのだ

「ああ、石田ね・・・」

「メイド喫茶とか年上の女性のぐどき方講義があつたぞ」

「なんか誰が提案したのか予想つくわ」

おそらく本庄千鶴と小島水色だろう。ちなみに年上の女性の口説き方講義は男子に高い支持があつたようだが不健全ということで除外された。

廊下のほうからすいじい勢いで走る音が聞こえた。

その音はこちらに近づいてきて、教室のドアを開く。

「わりい！ちょっと匿ってくれー！」

入ってきたのは恋次だった。

「え？ どうしたんだよ？」

一護が恋次に理由を聞こうとすると、もう一度ドアが開いた。

「ゴルラア 恋次イ！ 出てきやがれ！」

「檜佐木さん、どうしたんすか？」

入ってきたのは顔と頭と運動神経が抜群で思考がちょっと残念な修

「おーー護、恋次見てないか?」

「ここにいますよ」

「あーー護でめえ!」

「よお恋次、いい加減諦めて入れや

「いやつすよ!」

二人は言い争いを始めてしまった。3人は置いてけぼり状態だ。

「あの、話がみえないんすけど・・・」

「ああ、実はな文化祭でバンドをしようと思つてさ、俺3年じゃん? 最後の文化祭の思い出作りに残ることしたくて・・・それで恋次を熱心に誘つてたんだよ。こいつドラムできるから」

「本当の理由は?」

「女子にキャーキャー言われたい」

なんとも本能に忠実な意見だ。

「熱心に誘つて言つよつあれ脅迫だろ!廊下でいきなり胸倉掴まれて『バンド入れや・・・』つて!」

恋次も苦労をしているようだ。

「へーーーー大変だな」

「・・・ですっと団はなんでも引き受けてくれるんだよな?」

怪しく光った修兵を見て、3人は嫌な予感がした。

「バンドメンバーになれ!」

(やつぱり・・・)

予想は当たつたようだ。

「どうしてもつて言つんなら引き受けますが、俺楽器弾けませんよ」

「私はギターを少しなら弾けますが・・・」

「俺はピアノなら弾けるぞ」

ルキアのギターが弾けるというのは修兵にとって以外だつたようで目を少し見開いた。

「よし、じゃあー護はボーカルな。朽木は俺とギターで、ウルキオラはベースな」

次々と決まっていくものに一護は頭を抱えたくなった。

「まあいいではないか！楽しそうだ！」

「努力はする」

ウルキオラとルキアは結構乗り気だ。

「てか、俺がボーカルでいいのか？」

「何を言っている！貴様しか適任はおらんだろ？！」

「いつも90点代を次々に出しているだろ？」

どうやら一護は歌がかなりうまいようだ。

「そりや楽しみだな！・・・つーことだ、諦めろ恋次

修兵はニヤリと笑いながら恋次にそういった。

「分かりましたよ・・・やればいいんでしょ

ついに恋次はバンドに入ることになった。

PM7:30 黒崎家

「ただいまー」

一護がガチャリと家の扉を開けると

「遅いわこの馬鹿息子がー！」

一護の父、一心がどび蹴りを仕掛けってきた。

「なんでだよー！ちゃんと門限守つて帰つてきただろ？がー！」

「余裕をもつて帰つて来い！」

恒例の親子喧嘩をしていると、妹たちが話しかけてきた。

「一兄、ヒゲにかまつてないでご飯食べたら？冷めるよ？」

「あ、おかえりー。もうーお父さん暴れないのー！」

「だ、だつて！」

娘に怒られる父を傍から見て、父としてどうなのだろうか、と一護が考えていると海燕が来た。

「親父、一護だつて友達との付き合いもあるんだからや、田代みでやれよ

そういうながら一護の頭をわしわしとなる。海燕に怒られていじける一心。

海燕は思い出したように一護に聞いた。

「そういえば一護、修兵達とバンド組むんだって？」

「げっ・・・もう広まってるのかよ」

「本人から聞いた。修兵が『お前の弟、口説き落としたぜ』って言いやがったから、何をしたって問い合わせた（齎した）らバンドに誘つた言ってた。で、何もされてないか？」

「くどい・・・何もされてねーよ。心配性だな」

修兵に少し同情しながら呆れていた。

海燕は自他共に認めるシステムでパソコンだ。あまりに心配しそぎてたまにうざがられる程に。

「え！お兄ちゃんバンドするのー？文化祭、絶対見に行くからね！ね、夏梨ちゃん！」

「え？う、うん。まあ頑張れば？」

大興奮の遊子に冷静な夏梨。双子でも反応は此処まで違うようだ。

「もー夏梨ちゃんてば素っ気ない！本当は嬉しくせこ

「なつ！？違うよー」

どうやらただ恥ずかしかつただけのようだ。

兄妹だけで話をしていると一心がぼそりと言つた。

「つう・・・子どもたちが話に入ってくれない・・・母さん早く帰ってきて・・・」

同時刻 栄木家

「姉様、兄様！文化祭でバンドに誘われたのですが、家にあるギターを使ってもよろしいでしょうか？」

「あら、バンド？珍しいわね、ルキアがするなんてルキアの姉、緋真が言った。

緋真はルキアと顔が瓜二つだ。性格はとても大人しく優しい女性である。

「ですっと固に依頼があつて引き受けたのです
「たのしそうねえ。白哉様、どうでしょ?」

緋真が聞いたのは数学教師の白哉である。緋真とは結婚していくルキアの義兄だ。

ルキアとは美的センスが似ていて自作キャラクター『ワカメ大使』はルキア絶賛らしい。

「良いも何も自分で決めることがだ。好きに使え
「ありがとうございます!」

「バンドはだれとするの?」

「一護とウルキオラと恋次と檜佐木先輩です
「男の子ばかりねえ。大丈夫?」

わっぽりルキアも年頃の女性なので緋真も心配なようだ。

「黒崎と阿散井がいるから大丈夫だろう・・・やるからには必ず成
功させる!」

「はい!」

力強く頷いた。

同時刻 シファーア家

「グリムジョー、飯ができたぞ!」

「おーう!」

ウルキオラとグリムジョーは一つ違ひの兄弟だ。

グリムジョーは高1でウルキオラとは性格も容姿も似ていなが
好きなもの(トマト)だけは一緒。

この兄弟はトマトを愛してやまないのだ。

「そういえば、ですっと固でバンドするんだって?」

「ああ、檜佐木に誘われてな」

「珍しいじゃねえか。何の楽器するんだ?」

「ベースだ」

「へえ・・・ピアノも習つて役に立つこともあるんだな
「俺も意外だつた。・・・テスラとノイトラに餌をやらねば」

「おお、 そつだつた。 テスラー！ ノイトラー！」

「わん！」 「にゃー」

グリムジョーが呼んだのは犬のテスラと猫のノイトラだ。
二匹はウルキオラに拾われ、この家に住んでいる。
餌をもさもさと食べる二匹を見て一人は和んでいる。

どの家も今日も平和なようだ。

大混乱の文化祭（1）（後書き）

一護が歌つまひつて「うのは私の希望です（笑）

海燕さん、またまた登場です。思いつきり私の分身です。
私も海燕さんにわしゃわしゃされたい！

緋真さんの口調が迷子。わからん……！

基本みんな仲良しですのでウルキオラとグリムジョーは喧嘩しません。

二人がもしゃもしゃトマト食べてゐるの絶対かわいい。写真撮りたい
（

テスラ飼いたい。絶対になついたらかわいい。

ではここまで読んでくださつてありがとうございました！
誤字脱字の報告、感想などお待ちしております！

大混乱の文化祭（2）（前書き）

おおおおおお遅れてすみません！

今回はバンドで個人の練習編です。

大混乱の文化祭（2）

翌日から練習が始まった。

曲名は「superativo il」ゆつたりとしたバラード曲だ。

作詞作曲は修兵がしたようだ。

その曲を一護達が聴き終わると、

「・・・へえ、結構いい曲だな」

「ゆつたりしてて聞きやすい」

好評のようだ。

「イタリア語、英語、フランス語、ドイツ語で愛に関係するものを詰め込んでみた」

「先輩らしきつすね」

感心しながら聞いていると、一護は何かに気が付いたようにハッとした。

「ちょっととまて！歌うの俺じゃねえか！恥ずかしすぎぬわー！」

一護が焦り始めるところキアが呆れたように言った。

「いまさら何を恥ずかしがつてある。もっと恥ずかしいこともしていただろう。中学生のときにクラスの女子に頼み込まれて女装とか・

・・・

「ああああああーーあのことを掘り返すんじゃねえーあれトラウマだからー！」

「何があつたんだよお前・・・」

中学生のときから苦労性だつたようだ。

「じゃあ、これ楽譜な。練習して来いよー」

そうしてその場は解散となつた。

sses 10vab1e~るあつ・・・また嘔んだ・・・もー何なんだよこれ！両回りなーよ！」

一護が愚痴を言いながら練習してると海燕がやつてきた。

「おーがんばってんなあ。調子はどうだ？」

「そいいいながら一護に温かいココアを渡す。

「あ、サンキュー。イタリア語だか英語だか知らねーけど訳分からねーよ」

「はは！大変だな」

苦笑いしながらも受け答えする。すると、

「あ、あと聞こいと思つてたんだけどよ、お前とルキアって付き合ってんのか？」

ブフォツと勢い良くココアを噴き出した。

「・・・はあ！？」

「いや、な？今学校でこの写真が流れてんのよ

そつ言いながら海燕が見せたのは一護がルキアを抱き上げてる写真だった。

「なんだこれ

「友達から回つてきた」

「ん？ここつて学校の裏庭じゃねーか。そういうえばこの前、用務員のハリベルさんに頼まれて掃除してたっけ・・・」

「で、どうやつたらこうなつたんだ」

海燕も不思議そうだ。

しかし確かに、掃除してただけではこんなことにはならないはずだ。

「上のほうに「ミミがあつてさ、その高さじゃ俺でギリギリ届かなかつたからルキアを担いで取つてもらつたんだ。そのときなんでウルキオラがケータイ構えてんのか気になつてたけどそれか・・・」

「お前も苦労してんだな」

海燕は少し一護に同情してしまつ。

「まあ、練習がんばれよ。兄ちゃんが本番しつかり撮つててやるからなー」

そういうながら部屋を出て行つた。

「やめろ！次の日から学校行けねえじゃねえか！……たく、あの兄貴は・・・。練習しよ。」

再び一護は歌の練習をし始めた。

同時刻 栄木家

「えつと次が二の「コードで・・・、二二からは二二つか？」

ルキアは楽譜と格闘していた。

「失礼する」

入ってきたのは白哉だった。

「随分熱心だな。少し気になつた事があるのだが良いか？」

「？はい、何でしょ？？」

白哉は真剣な顔をしてこう尋ねた。

「黒崎一護と付き合つてゐるといつのは本当か？」

ガツチャーンと譜面台を倒した。

「す、すいません・・・。それはどこで？」

「今日携帯で騒いでいた者を注意したとき写真をみせられ、聞かれ

たのだ。これは本当かと。」

白哉に見せられた写真は海燕に送られてきたのと一緒にだつた。

「おそらくその写真を流したのはウルキオラです。全くあやつは・・・。その噂は嘘ですから気にせずにお願いします」

「どうか。では失礼する」

パタンと扉が閉められた。

「えーとそれから・・・」

再び楽譜と格闘し始めたのだった。

同時刻 シフアーハー家

ウルキオラの部屋からは美しい音色が聞こえてくる。

「・・・こんな感じか」

パチパチと拍手が聞こえてきた。

「グリムジョーか」

「すげえじゃねえか。もつ覚えたのか?」

「大体はな」

「そういうえば、学校で今噂になつてゐる黒崎と朽木の写真を流したの
お前だろ」

「そういうながら写真を見せる。

「ああ。今回もいい具合に広まつてゐるな」

今までにも何回かはあつたようだ。

「あの二人はからかい甲斐があるからな」

ウルキオラが少し笑みを浮かべて言つとグリムジョーが驚いたよう
に言つた。

「・・・お前あいつらと一緒に居るよになつてから変わつたな。
いい意味で」

「そりが?まあ、あいつらと居るのは面白いからな」

「ふーん。ま、頑張れよ。ここトマト置いておくからな」

そつとつてトマトが三つ乗つた皿を置くと部屋を出でていつた。

「・・・やつとトマトをつまこな」

トマトをじゅくつと食べながら呟つてゐた。

大混乱の文化祭（2）（後書き）

歌詞については触れてやらないでください。

イタリア語と英語、フランス語、ドイツ語を適当に並べただけです
ので（汗）

曲名の「superlativo il」とは最上級の愛とかそんな感じだつた気がします（アバウト）

一護はお母さん似だから女装が似合ひと思つんだ。ね？（誰に聞いている）

ウルキオラの過去は書いつかないと迷つてます。

では「」まで読んでくださいありがとうございました！
誤字脱字の報告、感想などお待ちしております！

大混乱の文化祭（3）（前書き）

遅れてすいませんでした！
今回で文化祭終了です。

大混乱の文化祭（3）

数日後の放課後、ですと団部室にて

……

「……ふう」

曲の合わせが終わり、一護が一息をついた。

「おー、結構出来るじゃねえか。この調子で本番も頑張るぜー。」

『おお！』

全員、張り切つていのよつだ。

そうして、毎日放課後は全員で部室で練習、家に帰つたら個人で練習をしていた。

始めは渋つていた一護もやるからには真剣に、という性格なので毎日練習をしている。

そういう日が毎日続き、そしてついに、本番がやつてきた。

文化祭本番　ステージ舞台袖

（・・・ん？）

一護は朝起きたときから、のどの調子がおかしかつた。いつもより声が出にくく、変だつたのだ。

そのうち直るだらう、と放つておいたのだが今になつて少し悪化してきただ。

「どうした一護？」

ルキアが心配そうに顔を覗くと

「いや、なんでもねえ。ほら、行こうぜ」

「あ、ああ

ステーシ

「」んにちはーー！壁のアイドル、檜佐木修兵でーすー。」
キヤーー！と観客のほうから歓声があがる。

「先輩、皆のアイドルとか寒いつす」

ではメンバー紹介か!!

修兵は恋次の突込みを華麗にスルーし、メンバー紹介に入った。

「ボーカルの黒崎一護です」

「俺は犬か」
一語はチミニレーツがナ好きたから
あけたら懐くぞ！」

少し茶々を入れながらメンバーの紹介をしていく。

メンバー紹介が終わると修兵が「グレープ仙は『つまらない』で手。くらべ、

残りの四人はポカーンと口を開けていた。

「初耳なんんですけど」

「そりゃそうだ。今考えたし」「うー口う

四人からはブーイングが来るが修兵はお構いなしに進める。

「ハセーな。じやも、歌つべー・・・『sunonation』

今までのぐだぐだが嘘かのように、始まると全員の目つきが真剣になつた。

adorabile	amore	eterno	affezio
nare	caro		
alement	amour	passionnel	cordi
affetto			

amants bien-aim affectionner d
orloter mignoter
idylle joliment aimer minois s
entimental...

一護の声は暖かい中にもしつかりとした声があり、それに寄り添う
ように弾かれるルキアと修兵のギターに、包みこむようなウルキオ
ラのベース、すべてをしつかり支えるドラム、と全てバランスよく
とられていた。

観客もそれにうつとりし、顔を赤らめている者までいた。

（これなら最後までいけそうだな・・・）

と、一護が少し安心しサビに入ろうと息を吸い声を出したりすると、

（・・・え？声が・・・でねえ）

一護が少し焦ると、修兵が小声で話しかけてきた。

「どうした？」

観客もおかしいと思つたようで少しづわつき始める。

（どうしたらしい？俺のせいだ・・・）

一護が焦るとルキアがこつそり耳打ちをした。

「大丈夫だ。任せろ」

どうにうことか聞こうとすると、恋次のドラムの音が聞こえ、ルキ
アとウルキオラが歌い始めた。

少し声が出るようになつた一護も慌てて歌い始めた。

affectionnement affectueux ten
drement affectueusement affectueux ten
avec tendrement affectueux ten
eux tendresses pour les beaux y

lovable auspicious darling to

starve for love

fruit of love love-s sake pass

ion

sweethart attachment longing f

or other

tender passion village amoureux

tomder amureux

passade sahnsuehtr

曲を終え修兵が話し始めた。

「いや - わりいわりい。サビに行くといひ間取り過ぎたわ。『あれ、

どうやって入るの?』って思つちまつてさー」

「先輩ー、しつかりしてくださいよー」

「つるせえ! 恋次のくせに!」

「なにその恋次差別!」

会場もクスクスと笑い暖かい空氣に包まれた。

舞台裏

「一護、喉大丈夫か?」

「んー、さつきよりはマシ」

ルキアと話していると、修兵が一護の顔を見てため息をつき、

バチンッ! とテロップンをした。

あまりの痛さに一護は身悶えうずくまつっていた。

「つたく・・・なんで早く調子悪いって言わない

「・・・え?」

怒られると思つていた一護はきょとんとしている。

「どうせステージ台無しにした、とか思つてんだらうけどそんなんわ

けねえだろ。

喉がかかるほど頑張つてくれたんだろう？ ありがとな」
頭をわしゃわしゃと撫でながら言つた。

「お前らもありがとな。おかげで最高の思い出になつたよ」
笑顔で全員に感謝を告げた。

大混乱の文化祭（3）（後書き）

ふおおおおおお・・・・・やつとできた・・・
お待たせしてすいませんでした！

英文の歌詞のほうは突っ込まないでください。
いろいろ間違つてますが触れないで！

満面の笑みの修兵パワーはすごいと思うのです。
一撃でノックアウトですね。

これからのお話は本日書いた活動報告にて詳しく書いています。

では、ここまで読んでくださいありがとうございました！
誤字脱字、感想などお待ちしております！

年上の人のが気になるんですがどうしたらいいですか？（前書き）

有言実行できなくてすいません！

今日は保育体験の話です。
アニメのオリジナルキャラが出てきます。

年上のあの人気が気になるんですがどうしたらいいですか？

「みんな～！今日はお兄ちゃんとお姉ちゃん達が遊びに来てくれました！仲良く遊びましょうね～！」

『は～い！』

今田は近くの保育園で保育実習が行われていた。

「元気だな～・・・」

「うむ！私も負けていられんな！」

「何張り合ってんだ」

子ども side

私は九条望実。4歳だ。今日はお兄さんたちが来たらしい。私にはあまり友達がない。いつも一人だ。みんなをボーッと眺めていると

「よつ！」

オレンジ色の髪の毛をしたお兄さんが話しかけてきた。

「・・・だれ？」

「俺は一護。お前の名前は？」

「・・・九条望実」

「望実か。望実はみんなとあそばねえのか？」
「かんけーない」

なんなんだ、こいつは。いきなり話しかけてきて。すると、そいつは私の髪の毛に触ってきた。

「なにをする」

「いや、綺麗だな、と思って」

「・・・え？」

「髪の毛の色、綺麗な縁だな」

初めてだった。みんなから変な色だ、と言っていたこの毛を褒められたのは。

うれしい。

「お前の髪の毛もキレイなオレンジ色だ」
少し恥ずかしかつたけど素直に言つた。

「本当か？ ありがとな」

そう、笑顔で頭をなでられた。

顔がだんだん熱くなつて、なんだかポワポワする。

「一護！」

知らないお姉さんが名前を呼んだ。

「おお、ルキアか。どうした？」

「向こうでその子と遊びたいと子供たちが言つてこてな。誘いに
来たのだ」

話している言葉は良く聞こえないけど、見えてモヤモヤする。

「望実、向こうに行かないか？」

「でも・・・」

向こうに行つたら一護と離れてしまつ。

「俺も行くから。な？」

「わかった」

そう言って一護の後ろを付いていく。

「お前も案外隅に置けんな」

「は？」

小さい声でなかなか話が聞こえない。

「ルキアお姉ちゃん！ 呼んできてくれた？」

「ああ、連れてきたぞ！」

「やつたーー僕たち、のぞみちゃんと遊んでみたかったんだーー」

「・・・私ど？」

びっくりした。だつて今まで話したことなかったのに。

「なにするー？」

「んー、じゃあねえ・・・かくれんぼしようつよー。」

「さんせーーのぞみちやんもいい?」

「う、うん」

いきなり話しかけられて焦った。

「よし、鬼は私たちがしよう。10分までに見つけられなかつたら鬼が負けでいいな?」

『はーー!』

「じゃあ10秒数えたら行くからな。・・・よーいドン!」

2人が目をつぶつたら一斉に逃げ出した。

私たちは木の上や机の下に隠れる。

私は水道台の下のくぼみに隠れた。

ここは見つかりそうでなかなか見つからない。

「10・・・よし、行くぞー」

「私はこっちを探す。貴様はあっちだ」

「へいへい」

数分後

「真子はつけーん」

「なんでわかんねん。ここマンホールの中やで」

真子は関西弁が特徴の男の子だ。

マンホールの中からひょっこり顔を出している。

「俺も昔マンホールの中に隠れて落ちそうになつたからな
(実話です)

「アホやろ・・・つじギヤー!..」

「うおー言つてるそばから落ちそうになつてるじゃねーか!..」

無事救出されたようだ。

「リサちゃん見つけたぞ!」

「みつかつてもーた」

「リサちゃん見つけたぞ!」

「みつかつてもーた」

「からせ」三つ編みでメガネをかけている関西弁の子だ。

「といつより「口」、暖炉の中だぞ。危ないだろ？？」

「」の前六車先生の机にエロ本を置いといて怒つて追いかけられたとき見つけたんや」

少し自慢げに話すリサ。

「なんというか・・・そういう物はまだ早い」

もう少し時間が経つとほとんどの子が見つかって残るは望実だけだった。

「「」にいるんだ？」

2人とも望実の前を何回も通つたが全然気づいていない。

「「」に隠れたんだろうね？」

子どもたちも不思議そうだ。

「お2人さん、あと10秒やで」

「本當だ！」

真子の言葉を聞いてカウントダウンをし始めた子どもたち。

「3・2・1・・・ゼローー！」

「のぞみちゃん出てきてーー！」

大声で言つと二人が立つていた後ろの水道の下からひょっこりと顔を出した。

「あー・・・そこか」

「すげー！のぞみちゃんつよーい！」

何が強いのか分からぬが子どもたちは望実を取り囮んでいる。

望実は少し照れた様子で話していた。

始めは馴染めなかつた望実だが一護たちが来たのがきつかけでみんなと溶け込んでいった。

夕方

「お兄さんとお姉さん達にありがとうの挨拶をしましょ？」

「ええーーー！？もう帰つちゃうの？」「

子ども達からブーイシングの嵐だ。泣き出している子もいる。

「みんな、わがまま言わないの。はい、ありがとうございました。は？」

『ありがとうございました』

校門前まで子ども達は送つてくれた。

「ばいばーい！」「また来てねーーー！」

そう言つて見送る子ども達の中で望実がこちらに走つてきた。一護の側までくると足にしがみ付いて、ルキアに言つた。

「負けないぞ！」

きょとん、としたルキアはすぐに察してクス、と笑つた。

「フフ、楽しみにしているぞ！」

そのやり取りの意味が分からぬ一護は頭に？を浮かべている。

そんな小さな九条望実の初恋

おまけ

「そういえばウルキオラと遊ばなかつたな」

帰り道、いつもの3人で話していると一護が言つた。

「ずっと女の方にままで」とをしろ、とせがまれていたからな

「珍しいな。父役か？」

「いや、執事役だ」

「・・・は？」

年上の人の方が気になるんですがどうしたらいいですか？（後書き）

THE・一時間クリティック

今回は護廷十三隊侵軍篇のオリジナルキャラクター、望実ちゃんが出てきました！

望実ちゃん好きなんですよー。可愛いですよね。

拳四と羅武は幼児に変改できませんでしたので先生です（笑）

おまけのウルキオラの話は妄想です（笑）

執事っぽくないですか？え？違つ？そつか・・・

では、ここまで読んでいただきありがとうございました！
誤字脱字の報告、感想などお気軽にどうぞ！

焼き芋をするときは注意しましょう（前編）

1ヶ月近くほつたらかしですみません!

今日は焼き芋の話です。

焼き芋をするときは注意しましょう

『焼き芋するから公園来いよ』

悪夢はこの一本の電話から始まった。

「おーい、来たぞー！」

「おう、こっちだ」

ルキアが叫ぶと一護が返事をした。

「一護！ 焼き芋は何処だ！」

「アホ、これからするんだよ」

何かに疑問を持つたウルキオラが聞いた。

「何故公園でするんだ？ 家でも出来るだらう」
「うちのバカ親父が騒ぎだしてな、公園でする事になつた」

バタバタと足音が近づいて来た。

「よー朽木にウルキオラー来たんだな」

「こんにちは」

海燕も友人の修兵を呼んだらしく一緒にやってきていた。

「よー元氣か？」

「お久しぶりです、先輩」

「バンドのやつ見たぜ？ 激かつたなー」

文化祭の次の日に海燕が撮ったビデオを黒崎家で見たようだ。ちなみに内容は、全体で撮られたものと、一護オンリーで映つていいものの比が2・3だったそうな。

海燕の意見『一護を撮らなきゃ誰を撮る』

「皆の衆一いつちで『ドキッ！黒崎家+の焼き芋大会』をするだ

！」

「またアレさんのかよ……」

（『ドキッ！黒崎家+の焼き芋大会』とは）
まだ焼いていない芋を半分に切り、少しきりぬいた所に指令が書かれた紙をいれ、新聞紙で包んでから焼ぐ。
当たつた指令には必ず従うこと。

（Wikipeidaには書いておりません）

「ようし！始めるぞ！」

『おー！』

何だかんだ言って、全員やる気十分だ。

30分後

「……げ、当たっちまつた」
「ざまあみろ！日頃の行いが悪いからだ！」
「女装しているてめえに言われたかねえよ。視界の暴力だ。消え失せろ」

一護の前で威張っているのはセーラー服姿の一護だった。
筋肉質な体とゴツイ顔には色々無理がある。

「お兄ちゃん達のじつちかに着てほしかったのに……」

ぼやつと遊子が呟くと、一護と海燕の背筋が凍つた。

「どうりで一護の指令はなんだ?」

「えーっと…『恋次に電話をして罵詈雑言を吐く』

「おー私のだな!」

指令を出したのはルキアだつた。まあ、ルキアらしいと言えばルキアらしいが、相変わらず恋次が不憫だ。

「お前、目が輝いているぞ。

…たく、友にこんなことしなければならないとは……」

「一護、お前も顔が緩んでいるぞ」

心無しか、眉間のしわが緩んでいた。

“ プルルルル……ピッ ”

『 よー一護。どうした?』

「恋次、悪く思うなよ

『 は? 』

「バーク、単細胞、変質、赤パイン!」

『 はあー? ちょっと待てゴルア! 喰睡売つてん 』

“ ピッ ”

「これでいいのか?」

「ああ、バツチリだ！」

満足そうな2人の様子を見た夏梨はウルキオラに聞いた。

「ねえウルキオラ君、あの2人つていつもこいつなの？」

「ああ」

「ふーん……」

物珍しそうな顔で夏梨は2人を見ていた。

もしやもしや……

「む、俺か」

声を出したのはウルキオラだった。

「指令はなんだって？」

「『モノマネをしろ』…か」

「あ、あたしのだ、それ」

ウルキオラは夏梨のを引いたみたいだ。

「…アレをする」

「まさか…アレか？」

「本当にアレをするのか？」

「ねー、アレってなに？」

3人が言っている「アレ」が気になつたのか遊子が聞いた。

「見ていれば分かるさ。アレの威力は絶大だ」
「夏梨、先輩、覚悟しておいたほうがいいですよ」
「「え！？」」

まさかここで話を振られるとは思わなかつた2人は驚いた。

「……いくぞ」

一護とルキアは唾を飲み込んだ。

「パースター！！」
パースター…スター…ター…

エゴーしながら町中に響いた。
すると……

「お兄様？どうかなさいましたか？」
「え！？夏梨ちゃん！？」
「あつ、え！？なに今の！？」
「マズいねえ、君の飯」
「おい修兵！？」
「ん！？なんだこれ！？」

ちょっととした混乱に陥っている4人。

「てか、久しぶりの台詞がこれってどうなの！？」

そんな言葉を無視して一護は説明をしていく。

「前に学校でウルキオラがこのモノマネをしたとき、クラスにいる

路端と石田、廊下を歩いていた冬獅郎が、さつきみたいな反応して
な……」

3人は遠い田をしながら話した。
余程大変だったようだ。

混乱が治まり、全員が食べおわった頃

「ふう……結構詮かったな」

他愛ない世間話をしていると…

「ゴルア！…今年もまた黒崎家かアアアアアアア！」

ほつきを持ったホリの深い男性が怒鳴りながら一いつちに走ってきて
いる。

「げつ！町長だ！」

一心がマズい、という顔をした。

「親父！今年も話してなかつたのかよ…」

「いや～…あの……てへ」

「「へへ じゃねエエエエ」」

びつやら許可を取らずにしていたようだ。

「とりあえず水をかけてにげるぞ！」『サー－－イエッサー－－』

海燕の掛け声とともに俊敏な動きであらかじめ用意しておいた水を

火に掛け、直ぐ様逃走した。

そして捕まえ損ねた町長は……

「……くそー！今年も逃げられた！いつか捕まえてやるぞ、黒崎家め
ええええ！！」

焼き芋をするときは注意しましょ（後書き）

某国擬人化漫画ネタ多くてすみません。

なかの人ネタが好きなんです！

あと、海燕と修兵が空氣ですみませんでした！

誤字脱字、感想などお待ちしております！

バイトを手伝え（前書き）

更新遅くなつてすいません！
今回はクリスマスのお話です。

バイトを手に取れ

今日はクリスマス。街中にはクリスマスソングが響き、装飾でキラキラと輝いている。

そんな中でもですつと団は通常運転でお送りします。

「ちよっとシラかせや
「「」……え~」「「」

ただいま、自分の顔にそつくりな人に絡まれています。

「ですつと団に命令がある」
「命令なんだ。頼みじやなくて命令なんだ」
「クリスマスにバイトがあるから手伝え」
「ちなみに否定という選択肢は？」
「そんなもんあると思つのか？」
『イイド、オモイマセン』

ですつと団に命令しているこの野性は極悪非道、どうの鏡といわれている白騎。

一護と顔がそつくりで、一護の顔の色彩をなくしたよつである。

「場所は二番街のブラッティガーデンとこつ店だ」
「店名物騒ぎがあるだろ」

「その店なら聞いたことがあるぞ。

店名は物騒だが店の中はいたって普通。ケーキやクッキーはかなりおいしいが、10個のケーキの中に一つだけケーキのスポンジがリアルスponジになっているらしい」

「ええ……いろんな意味でプラッティージャねえか……」

ウルキオラが簡単に説明すると一護は渋い顔で突っ込んだ。

「まあそういうわけだから今日の夕方、五時からしつかり来いよ。もし来なかつたら……わかつてゐよな？」

『モチロンデス』

ですつと団は素直に応じた。

PM5:00 プラッティガーテンにて

「白崎さん、来たぜー」

三人が店に入つていけば、お密さんが3・4人来ていた

「おう、来たか。まあこっち来い」

白崎に連れられて店の奥に入ると、店長と名乗る人が出てきた。

「」やつらが白崎が連れてきた者たちか？」

彼の名は斬月。サングラスをしていてかなり長身の男だ。

「はい。今日はよろしくお願ひします」
「いや、いひひひ急なことで済まぬな。ひひひの息子のひと
だ。わすんとお願ひもしていのだひ」
「……息子?」

三人に衝撃が走った

「ああ。聞いていなかつたか?ここはあいつのバイト先であり、あいつの家だ」

(((に……似てない)))

三人は同時に、なぜこの人から白崎が生まれたんだろうと思つた。

「せっそくだが、お前たちにはこれ着てもいい」「う

そう言って渡されたのはサンタのコスプレ衣装。ルキアのはスカートタイプだつた。

「……これは？」

一 サンタの衣装だよ

「そんなのみりやわかるよ。なんでこれ着んの?」「これを着て店の前でケーキを売つてもらうから」「まじかよ……」

渋る一護と不服そうなウルキオラ。ルキアだけが楽しそうだ。

「良いではないか！面白いそうだ！」

「お前だけな」

「黒崎イ、そんなにこの服が嫌だつたら長い髪のウイッグ被つて女子バージョン着るか？」

「ありがとうございます」「男性物を着させていただきます」

「ヤニヤとしながら黒崎に一護は即答した。

「一護、顔色悪いが大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ。少し昔のことを思い出しただけだから……」

ペカー（トラウマが開く音）と一護の頭の中で鳴っている。（文
化祭編参照）

「では、これらを頼む」

三人は着替えるとすぐにケーキを渡され店前で売った。

「ひらりプラッティガーテン！店名はアレだけど、味は絶品！ぜひお買い求めをー！」

順調に売りさばいて行く三人。

しかし一定の量を超えるとケーキは売れなくなつてくれる。

「白崎さん、限界がきたぜー？」

「まだまだいるだろ。もうちょいいやれや」

「いや、もう無理ですって」

「チツ……しゃーねーな、秘密兵器を出すか。

……おーい！天鎖ーー！」

白崎がそう呼ぶと、奥から眉間にしわを寄せた子供が出てきた。

「なんだ白崎。『ひるせい』」

白崎が秘密兵器として呼んだのは、小さな子どもだった。
子どもの名は天鎖斬月といつらしき。

「『ひつは俺の弟でな。』この店の販売員だ」

白崎が説明をしていると天鎖斬月と一緒に顔を見合させて大きく目を開いた。

「…………ん？お前、もしかして……」

「…………貴様はあのときの…………」

「どうした、知り合いか？」

「『ひつ』の前言つていた恩人だ。……あのときはすまなかつた。助かつた」

「いや、俺は当たり前のことをしただけだし……」

二人は面識があつたようだ。

「とりあえず天鎖を連れて行け。バカ売れするから」

「まったく貴様は……毎年この時期になると『ひつか』……」

「？？？」

一護は一人の会話についていけない。

「一護遅いぞ！……その子どもは？」

「白崎さんの弟なんだつてよ。そんで秘密兵器いらしー」

「？ 意味がわからんぞ」

「俺もよくしらねえ……」

三人が首をかしげていると、天鎖斬月は近くにあつたマイクを手に取つた。

「これ、借りるぞ」

「おう、なにするんだ？」

「いいから見てる。それと貴様らは適当にポーズをとつておけ

「は？」

スウ……

天鎖斬月は大きく息を吸つと、

『「いらっしゃりラッティガーテン！舌がとろけるほどおいしいケーキが
売つてゐるぞ！

今なら二タイプのサンタクロースが手渡ししていきます！』

天鎖斬月はテレビショッピングのジャパネットた た並に宣伝し始め、一護にマイクを向けた。

『こまや王道のシンデレサンタ!』

「……うええ！？俺！？」

「いいからそれっぽいことを言え」

「お、お前のために作ったんじゃないんだからな！た、たまたま多く焼きすぎただけなんだからな！（涙目＆顔赤らめオプション付き）

「

見ていた数十人（主に女性）は前かがみになつたり、鼻血を出して倒れている。

『お次は長年片思いしてきた幼馴染にクリスマスケーキを渡す女の子!』

次はルキアにマイクを向けられた。

「む、私が。……」れをお前のために作ったんだ。……よかつたら、受け取つてくれないか……？（上目遣いオプション付き）

主に男性陣が身悶えている。

『最後に俺様ドリ系でどつだ!』

「俺の作ったケーキが食えないところのか？その口に無理やりねじ込んでやる（□元亞みオプション付き）」

一部の女性から「ドシドカーチー」と、聞こえてくる。

《さあさあキューんとした方、萌えーと思つた方、ぜひフワッティガーテンのケーキをビュッセー》

天鎖斬月の宣言が言ひ終わると同時にビュッセーと人の波が押し寄せた。

10分後

店の前には鼻血の痕が点々と付いていてまさしくラッティガーテンと化していた。

そして……

「完売した……」

「意外と楽しかったぞ」

「もういやだ俺泣きたい」

それぞれ違つた感想を述べる。

そこへ白崎がやってきた。

「おーおーがんばったじゃねえか。」白崎さん。……つて一護どうした。元気ねえな

「まあ、そつとしどいてやつてください」

「原因はこれだらう」

天鎖斬月が持っているのはボイスレコーダー。
ぽちっと押すと……

一護のツンデレセリフが流れた。

「おー、見事なツンデレだなあ！」

「心配するな。今から『ブラッティガーデン・モバイル』で配信す

「なにそれ心配しかできない！」

五人で雑談（？）うをしていると店の中から斬月が出てきた。

「今日本がかりたが。正直かなづかうた

「二十九日はあつがいがれこめた」

三人はお礼を言つて帰ろうとすると天鎖斬月は一護の服のすそをひつぱつた。

「もう帰るのか?」
「ああ、まあな」

辺りはすっかり暗くなっている時間帯。これ以上暗くなれば歩くのも危険になつてくるだろう。

しかし天鎖斬月は離そうとしなかつた。

「うーん……どうしたものか」

三人が困っていると白崎が助け舟を出した。

「天鎖、そいつらにも事情があるんだ。離してやれ。
……それに、そいつらの所になら俺がいつでも連れて行ってやるよ
……！本当に！」

天鎖斬月は白崎の言葉を聞いたとたん、目を輝かせて服を離した。

「おう！ いつでも来いよ！」
「楽しみにしているぞ！」
「……あの販売術を教えてくれ」

三人も大歓迎の様子。

「じゃあ、またな！」
「……ああ、今度必ず行く」

そういつて三人と白崎一家は別れた。

翌日

お昼休み、三人は教室で食べていると、誰かのケータイが鳴った。

『お、お前のために作ったんじゃないんだからな！ た、たまたま多く焼きすぎただけなんだからな！』

「む、
私が」

なにもなかつたかのようにルキアはケータイを取る。教室は静寂に包まれていた。

「さて、なんの」「いや、

何で最後まで流してから取るー?」

— そんなものの個人の自由たゞ二、

一護は顔を真っ赤にして抗議、ルキアは半笑いで受け流している。

1

次に鳴つたのはウルキオラのケータイだつた。

「いいだらけ、別に。白崎さんに聞いたなら昨日の今田で10000

「アケセス以上にしてない」と「うれしくね」と「もう嫌だ」の間に「恥ずかしくて死ねる」という文脈が組み込まれる。

「まあまあ」

「お前らなんか嫌いだバカヤローーーー！」

バカヤロー……バカヤロー……ヤロー……ロー……

一護の悲痛な叫びが学校中に響いた。

バイトを手伝え（後書き）

久しぶりにパソコン触って腕がつりそうです……（ピクピク）

クリスマスまでに書いて少し安心。

天鎖斬月大好きだよ！かわいいよあの子！
原作の一護への思いはジーンときた。

ツンデレは大好物なんですけど、こんな感じなのかな？
もし違つたら教えてください！

私もあるのボイス（森田こゝ）欲しい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3501w/>

ですっとダンス

2011年12月20日16時47分発行